

市場経済化のなかの 可食野生動物利用

中国雲南省国境地帯のハニ族の食生活からみる生業戦略

The Hani People's Use of Edible Wild Flora and Fauna
in the Border Region of China

葉山 茂

HAYAMA Shigeru

はじめに

①調査地の概要

②換金作物栽培の諸相

③食生活における食材獲得手段

④水田における可食野生動物植物の集め方

⑤考察—市場経済化を支える可食野生動物植物利用

おわりに

【論文要旨】

本稿は中国雲南省の最南部、ベトナムと国境を接する金平県者米郷の格馬集落に住むハニ族を事例として、彼らの生業活動とその生業活動の傍らでおこなわれている可食野生動物植物の利用について明らかにすることを目的とした。そして、者米地域で急速に進みつつある市場経済化のなかで、可食野生動物植物の利用がどのように成立しているのかを検討した。

格馬のハニ族の生業活動はレモングラス、キャッサバ、水稻の3つの換金作物の栽培を中心にしている。格馬が属する者米郷では定期市がさかんである。者米郷内や近隣の地域に住む少数民族は、それぞれ集落で生産した作物を定期市に持ち込んで換金することで生計を立てている。そして定期市を媒介として、それぞれの集落が生業の差異化を図って分業化している。こうした状況のなかであって、格馬の人々がとった生業戦略は者米地域に流通するものを作るのではなく、大都市向けの換金作物の生産に徹底的に依拠するものであった。

換金作物に特化した生業形態をとる格馬の人々は食生活では可食野生動物植物を積極的に利用していた。食事内容の調査から、定期市で買うものと狩猟・採集で得た可食野生動物植物がほぼ同じ頻度でつかわれていることがわかった。そこで、狩猟・採集の活動に注目すると、格馬の人々は水田で多くの可食野生動物植物を獲得していた。つまり換金作物の生産をする空間が、狩猟・採集にもつかわれていたのである。格馬の人々がつかう可食野生動物植物はどこでもよいオープンアクセスの資源で、この資源をめぐる競争は集落内外を問わず見られなかった。

以上の結果から、換金作物の性格と可食野生動物植物の利用が続いていることについて考察した。この地域の換金作物は広域で急速に作付けが進むため、高額な収入を期待してもすぐに生産過剰になって値崩れを起こす性格がある。そして換金作物に依存する生業戦略をとる格馬の人々にとっては、可食野生動物植物は積極的に利用するものであるとは言っても「あるべきもの」ではなく「あってもよい」程度に必要なものであり、換金作物の価格の不安定さを軽減するクッションの役割を持っていることを指摘した。また同時に可食野生動物植物の利用はいわば地域社会が市場経済化していくための元本としての役割を果たしており、一見伝統的な活動が地域社会の市場経済化を下支えする要因になっている可能性を論じた。

【キーワード】少数民族、換金作物、開発、定期市、狩猟採集

はじめに

本稿は著しい市場経済化が進む中国国境地帯の少数民族ハニ族の村をとりあげて、人びとが市場経済化にどのように対応しているのかを検討することを目的とする。

生態人類学や文化人類学の先行研究は市場経済化やグローバリズムの進展にともなって伝統的な社会が変容する過程について多くの考察をしてきた。たとえば池谷和信はアフリカのカラハリ砂漠に生きる狩猟採集民ブッシュマンが近代化にともなって、いわゆる伝統的な狩猟から商業的な狩猟へと変化し、狩猟圧の増加と平等主義的な社会制度の変容をもたらしたことを報告している〔池谷1996〕。同様に松田凡はエチオピア西南部に住む農耕民ムグジを事例として、一見干ばつという環境的な制約によって国外からの食糧援助に頼らざるをえない状況にあるように見える人びとが、じつは生業戦略のなかに食糧援助の存在を組み込んでいる場合があることを報告している〔松田2005〕。

こうした考察の多くは、近代化を経るなかでつくりあげられてきた現在の人びとの生活のありようが、自然と人の関係という単純な構図ではなく、むしろ植民地主義における宗主国や中央政府の権力との関わりや国際社会の地域社会に対する政治的関与の仕方、グローバルな市場経済と深く結びついていることを示している。

アジア地域を対象とした研究においても、自然利用の形態の変容はさかんに論じられている。たとえば秋道智彌はラオスの湖沼における資源利用形態の変化を通時的に検討する視点から、村で共有する資源であった湖沼の魚類が商品として流通することによってもたらされた地域社会の変容を論じている〔秋道2007〕。

雲南省のジノ族を調査した阿倍卓は、中国の少数民族が直面する近代化がオセアニアやアフリカなどの民族集団の場合とは異なり、歴代王朝や激動する中国の近現代史と無関係には語れないとする〔阿倍2002〕。そして中国の少数民族を考える場合にはヒトの自然環境への適応だけでなく、変わりつづける政治・社会・経済環境への人びとの適応を考慮しなければならないと論じている。

言うまでもなく、中国では辺境と言われる地域であっても、政治的権力は行き渡っており、その点は考慮する必要がある。ただし他地域では徹底された集団化などの政策も、本稿で事例とする雲南省の国境地帯では徹底されることはなかった。こうした点からみれば、政治的な影響はほかの地域に比べて、過去においては少なかったようである。しかし1980年代以降、本稿で論じる地域も生産責任制の導入や急激な市場経済化の影響を強く受けるようになった。こうした変化のなかで生業活動を営む少数民族が、いかに市場経済化と向き合っているのかについて論じることが本稿のねらいである。

本稿に用いたデータは2003年11月から2005年3月にかけて断続的にのべ270日間、現地住み込み調査をして得たものである。

①……………調査地の概要

(1)急速な開発の進む国境地帯

本稿で対象とするハニ族の村、^{ぐーま(1)} 格馬は^{じょいみい} 者米郷にある集落の一つである。者米郷は中国雲南省の省都、^{くんみん} 昆明から250kmほど南にあり、ベトナムと国境を接する地域である(図1)。行政区では^{ほんふう} 红河^{はに} 哈尼族^い 彝族自治州のなかの^{じんびん} 金平県に属する。者米郷は東西におよそ30km、南北におよそ10kmで、南北に細長い(図2)。

者米郷はベトナムと国境を接する南側の標高が高く、北に向かうにしたがって標高が低くなり、もっとも低い標高600mから500mの谷を西から東へと山を縫うようにして者米河が流れている。者米河の北側は^{らおじざい} 老集寨郷であり、急峻な山が連なっている。この地域は者米河を挟んだ峡谷である。

者米郷にはタイ族、チワン族、ヤオ族、ミャオ族、⁽²⁾ クーツォン族、⁽³⁾ ハニ族の6つの少数民族と⁽⁴⁾ ハーベイ人、⁽⁵⁾ 少数の漢族が暮らしている。また老集寨郷の南側の地域には⁽⁶⁾ アールー族やハニ族が暮らしている。⁽⁷⁾

2つの行政区にまたがったこの地域では、人びとは者米河沿いの町々で開かれる定期市に自分たちの集落でつくった産物を持ち寄って売買している。者米郷と老集寨郷の南側の一部の集落の人びとは、行政区を越えて一つのマイクロな商圈を形づくっている。

それぞれの定期市は6日に1回開かれる。者米郷のなかには定期市が開かれる町が3つある。ま

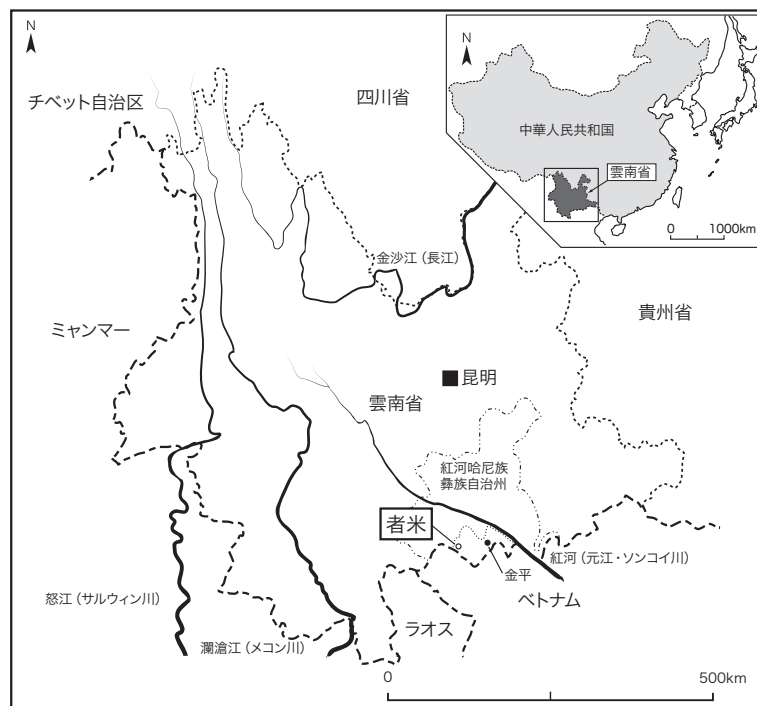


図1 者米の位置

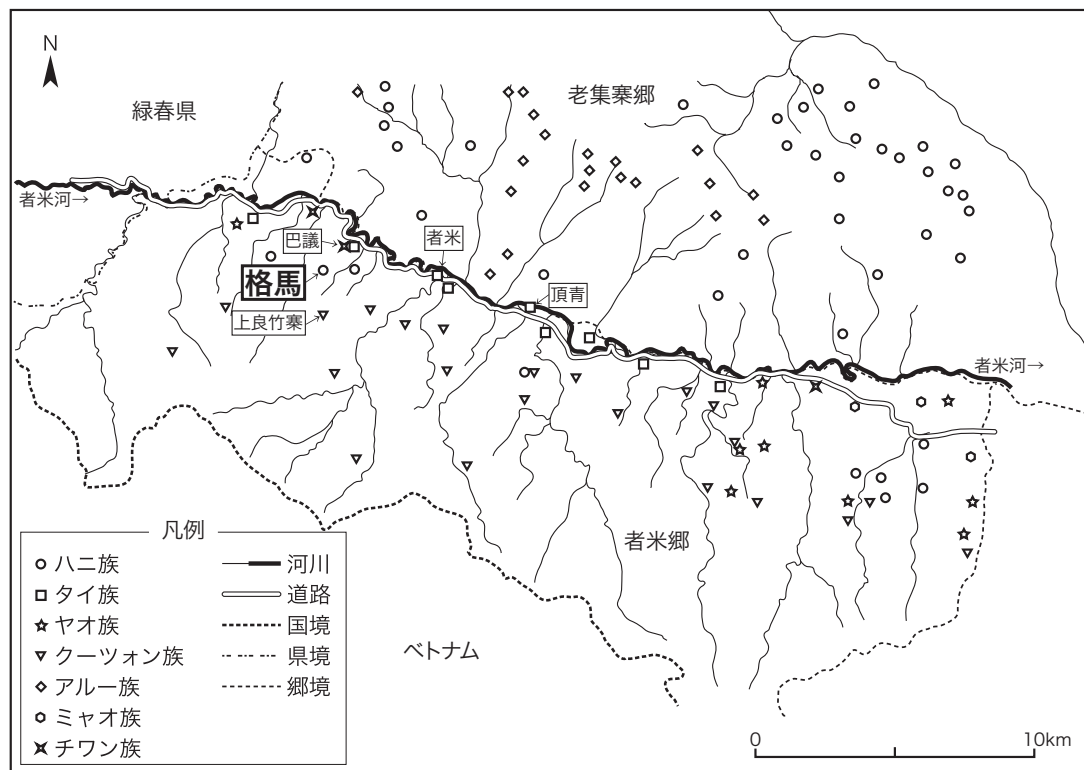


図2 者米郷の集落と格馬集落の位置

た郷外で開く3つの定期市とあわせて、1日ごとに巡回するサイクルができています。この地域の定期市をくわしく調べた西谷大は、この地域ではそれぞれの少数民族が生業を差異化して分業化することで、者米郷とその北側の老集寨郷の一部が一体になった一つの生活世界がつけられてきたと論じている〔西谷 2005a, 2005b, 2007〕。こうした地域のあり様を育んだのは、地域の人びとの絶え間ない折衝であり、同時に中国の中央や地方の政府による政策である。

一見すると地域内で民族ごと、集落ごとに分業することで、閉じた経済的な関わりをつくっているようにみえるこの地域の経済は、近年になって急激に変わりつつある。この地域の人びとはこれまででも地方政府の助けを借りて新しい換金作物をとり入れてきたが、2003年以降、そうした努力がさらにさかんになった。

金平県の中心である金平から者米郷の中心である者米まで車が通る幹線道路ができたのは1980年代後半である。この道路ができたのをきっかけに、この地域の人びとは政府の手助けを借りて換金作物をつくるようになっていった。人びとはレモングラスやパラゴムノキ、草果つあおくおとよばれるカルダモンつあおくおの一種である香辛料など、より商品価値の高い作物を地方政府の指導のもとでつくってきた。こうした動きは2004年に幹線道路が舗装されて10t以上の大型トラックが通行できるようになるなど、交通の利便性が増したことでさらにさかんになった。人びとはより商品価値の高い作物を探して新たな試みをし、ときには水田をバナナを栽培する業者に貸して現金収入を得ようとするなど、人びとが現金を得ようとするなかで、この地域の風景は変わってきた。

地域の経済活動が活発になるにしたがい、人びとの暮らしぶりも変わりはじめた。たとえば幹線

道路沿いに住むタイ族やチワン族などの少数民族はバイクを買って乗るようになった。また伝統的な竹でつくった家をやめて、コンクリートでつくった家を建てるようになり、テレビなどの高額な家電製品を買う家も増えている。また、この地域の人びとの定期市に対する依存もさらに高まっている。それまで田畑やそのまわりでさまざまな食料を得てきた人びとが定期市で食材を求める機会も増えた。

一方で現金経済が活発になるにつれて、地域内の少数民族ごと、集落ごとの経済的な格差が大きくなってきている。幹線道路沿いに住む少数民族は地の利を生かして換金作物で大きな収入を得るようになり、幹線道路から遠い高地に住む少数民族は地方政府の援助もあって高額の収入を得るようになった。ところが幹線道路沿いと高地の間の山腹に住む少数民族は、現金収入を得るための有力な換金作物をみつけられないままになっており、現金収入の面からみると高地や谷底の集落に住む人びとよりも収入が少ない。本稿でとりあげるのはこの中層の山腹に住む少数民族ハニ族である。本稿では彼らの生業活動と食生活の関わりについて論じる。ハニ族は現金収入を得るためにまわりの少数民族の集落から情報を集め、政府の援助を受けてさまざまな換金作物の栽培を試みながら、一方で田畑や山地に生息し食べられる野生の動植物、可食野生動植物をさかんに食べている。この地域のハニ族にとって可食野生動植物を食べる習慣は古くからある、いわば伝統的な生活の手段である。しかし彼らの可食野生動植物の利用は、単に伝統的な生活をつづけているという消極的な側面よりも、むしろ市場経済化への積極的な適応の仕方という側面があるようにみえる。以下では市場経済化が進むなかで人びとが変化にいかに対応してきたのかを、者米郷のハニ族の集落、格馬を事例にみていこう。

(2)山腹のハニ族の集落, 格馬

ハニ族の集落、格馬は者米郷の政府がある者米の町から直線距離で4km西にある山腹の集落である。集落へは者米の町から西に4km、幹線道路を歩き、タイ族とチワン族の集落である巴議ばいから2km山道を登る。巴議の集落と格馬の集落との標高差は330mあり、格馬の標高は900mである。タイ族・チワン族・クーツォン族の集落とともに「者米郷下新寨村委会」という行政組織に属している。

格馬の人口は2005年2月には男性92人、女性91人、合計183人であり、集落の戸数は40戸だった。この集落に住む人びとはほとんどがハニ族である。40戸のうち39戸が行政上のハニ族であり、1戸は行政上のクーツォン族である。

日常生活のなかではクーツォン族とハニ族の間に大きな違いはない。クーツォン族の家族は自らをハニ族だといい、集落に住むハニ族も彼らをハニ族だと説明する。習俗や服装、活動などに違いはなく、外見上や暮らしぶりから民族の違いを区別することはできない。格馬のハニ族とクーツォン族が別の民族だとわかるのは各自がもつ身分証明証をみたときだけである。

格馬の集落内には11の姓を名乗る人びとがいる。張じやん、王わん、李り、楊やん、陶たお、馬ま、石しい、何ふ、陳ちん、範ふあん、ぶ普である。もっとも多いのは張姓であり、12戸ある。その次に多いのは李姓で6戸、陳姓が4戸がつづく。そのほかはそれぞれ1戸か2戸である。また普姓は格馬の南にあるクーツォン族の集落、じやんりやんじゅうざい上良竹寨じやんりやんじゅうざいに多い姓である。

格馬のなかで大きな勢力を構成している張姓の人びとであるが、実際には発音の似た3つの姓の

人びとが同じ苗字を名乗るようになったものである。およそ50年前の1950年代に格馬には張姓と江姓、章姓の3つの姓を名乗る集団があったという。この3つの家系は本来的に血縁関係はない。これら3つの集団は発音がよく似ていたことからまとめられて、すべて張姓を名乗るようになった。⁽⁸⁾つまり格馬には実際には13の出自の異なる集団が生活している。

集落の人びとの来歴をみると、この集落は長い間、同じ場所にとどまって構成員を変えずにきた集落ではない。格馬の人びとはいくつかの地域から集まって集落をつくってきたと考えられる。40戸のうち6戸は1950年ごろまでに、近接する元陽県からやってきた2人兄弟とその子孫の家族である。また、40戸のうちの5戸は者米の町に住むタイ族から分かれて格馬にやってきた人びとだという。

こうした人びとの語りがどこまで正確であるかはわからない。しかし人びとが長い間かけて同じ場所にいて生活してきたというよりは、小さな移動を繰り返しながら結果として現在、格馬に集まって住むことになったとみることができる。

(3) 格馬の土地と生業

格馬の土地は、標高570mの者米河沿いの緩斜面から標高1,100mの山間地まで、標高差およそ500mの間にある(図3)。格馬の土地の総面積はおよそ190haであり、それぞれ境界を北側がチワン族とタイ族の集落である巴議と、東側がハニ族の集落である牛籠と、北側と西側がクーツォン族の集落である上良竹寨と接している。

格馬の土地を用途別に分類すると集落、水田、斜面畑、森林、草地にわかれる。者米河沿いの標高570mの緩斜面はグマロデ *guqmal loldei*⁽⁹⁾ とよばれる。グマロデとは「格馬の川から水を引いた水田」という意味である。この場所は山腹なかでも緩斜面であり、大きな水田ができた。

また、巴議との境界から格馬の集落がある標高900mまでの場所は耕地である(図4)。「要种田在山下、要生娃娃在山腰」(水田は山の下につくれ、赤ちゃんは山の中腹で生め:邦訳:筆者)[李1998]と言われるように、ハニ族は一般的に集落より標高の低い場所に田畑を拓いてきた。

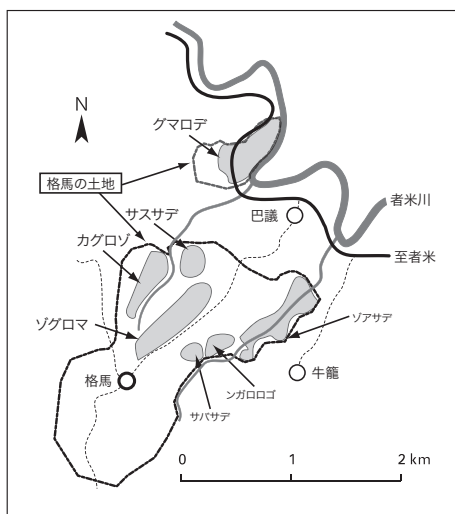


図3 格馬の土地の略図

格馬の人びとは水田を集落より低い尾根筋や山の斜面の一部、谷底に拓いている。また、尾根から谷にいたる山の斜面は畑としてつかっている。耕地のうち、水田をサデ *xaldei* といい、それ以外の畑をドヤ *daolyal* という。一般的には植えている商品作物の名前をドヤという語の前につけて、モドゥドヤ *moqdel daolyal* (キャッサバ畑) とかポピドヤ *paoqpil daolyal* (レモングラス畑) などとよぶ。格馬の土地には6つの地名がついている。集落の下に広がる尾根筋のことをゾグロマという。また、格馬の東の谷にはゾア、ンガロロゴ、サバという地名があり、西の谷にはサスとカグロソという名前がある。それぞれの名前のあるところには、すべて大き

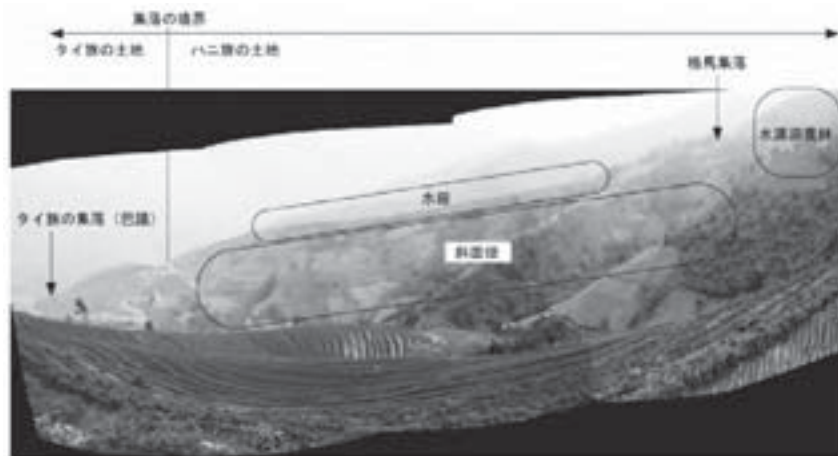


図4 格馬の土地利用

な水田をつくっている。

格馬の集落より高度の高い場所には森林と草地、休耕地がある。集落より低い場所は休耕地もほとんど残っていないほど徹底的につかっているのに対し、集落より高い場所は森林や草地、休耕地を残している。森林は水を確保するための水源涵養林だという。集落より高い部分でも、集落の影になっている山の斜面は草地にして、水牛の放牧地に使っている。水牛を放牧する土地は、数年に一度火入れをして草地に戻す。聞きとりによれば、草地に火入れをするのは格馬の人びとではなく、上良竹寨のクーツォン族だという。

(4) 生業の歴史

格馬の歴史を生業にかかわる出来事をみていこう。格馬の歴史は聞きとり調査から1900年ごろまでさかのぼることができる。

1900年ごろ、格馬の集落は現在クーツォン族の集落である上良竹寨の場所にあったという。上良竹寨は現在の格馬から2kmほど離れた山の中にあり、標高は現在の格馬より200mほど高い。ハニ族はクーツォン族とともに集落をつくり、小規模な水田と焼き畑をしていた。焼き畑ではおもにキャッサバと陸稲を栽培したという。

格馬の人びとの話によれば、1940年代にクーツォン族と争いをするようになり、ハニ族の一部とクーツォン族が現在の格馬の位置まで下ってきたのだという。時を同じくして、当時の格馬にいたクーツォン族の大半は上良竹寨よりもさらに標高の高い場所に戻ったという。現在の上良竹寨は、その後、地方政府の政策にしたがって下山してきたクーツォン族が住み着いたものである。

山を下ってきたハニ族は現在の場所に格馬集落をつくり、尾根筋に水田を拓き、山の斜面に畑をつくって生活をするようになった。山を下ってきても長らく、水稻、陸稲、キャッサバの栽培をしながら生活をしてきた。しかし、水の確保が思うようにならず、しばしば水が不足するようになったという。また、飲料水は1.5kmほど離れたわき水の出る場所まで竹筒を持って行って汲んでいたという。1980年ごろまでは、地方政府の方針でブタの飼育が義務づけられており、春節の前に必ずブタ1頭を政府に納めなければならなかったという。ハニ族は年越しにブタを1頭屠殺して食べる習慣がある。つまりつねに2頭のブタを飼っていなければならず、1頭しか飼えないときは年越し用の豚を用意できないこともあったという。

格馬の水田は1980年代になって広がった。このころから国家の改革開放政策のもとで地方政府が個人の人々の努力で水田を広げるように推奨し、個人が開拓した水田は永続的に家族でつかうことができるようになった。水を引くことのできる条件のよい斜面畑をもった人びとは斜面畑を水田につくり替えていった。しかし水は1980年代になっても十分ではなかったという。

1985年になって、3kmほど離れた新たな水源から水を引いた。新たな水源を得たことで水稲を育てるのに十分な量の水をつかえるようになったという。この水源を得たことで、格馬の人びとは陸稲の栽培をやめ、米はもっぱら水稲でまかなうようになった。一方、陸稲を栽培しなくなった斜面畑では、キャッサバを栽培するようになり、キャッサバ畑が広がったという。

1995年になるとレモングラスを栽培するようになった。このころから換金価値の高い換金作物の栽培がさかんになっていった。レモングラスの栽培がはじまると、格馬の人びとはレモングラスをおもな換金作物とするようになった。

1998年に者米の町でハイブリッド米の種もみを売るようになり、格馬でもハイブリッド米を植えるようになった。ハイブリッド米が広まったことによって、米の収量が増えて余剰米を商品として販売できるようになったという。

2002年に格馬の山のふもとにある巴議でパラゴムノキの苗木を栽培するようになった。すると格馬の人びとはパラゴムノキの苗木を買って、レモングラスの斜面畑におよそ5m間隔に幅1mほどのテラスをつくり、パラゴムノキを植えるようになった。2004年9月になると、バナナのプランテーション業者が者米郷に入り、幹線道路に近い水田を借り上げはじめた。格馬の人びとで者米河沿いのグマロデに水田を持っていた人びとは、グマロデにしか水田を持っていなかった1軒を除いて、すべて水田をバナナプランテーションの業者に貸した。水田は1ム⁽¹⁰⁾あたり1年に650円で貸し、土地を貸した人びとは年収の2倍から3倍の現金を受けとった。

2004年から政府の方針にしたがって、政府から3万円の資金援助を受けて巴議から格馬に登る道路をつくり、2005年2月に完成した。この道ができたことで、山の上でのパラゴムノキ栽培などがさかんになることが期待されているという。

近年になってこの地域の現金獲得の手段は急激に変わりつつある。しかし、ここ10年についてみると、格馬の人びとにとってもっとも基本的な現金獲得の手段はレモングラスとキャッサバ、うるち米の3種類を育てることだった。以下では、この3つの換金作物を中心とする生業活動についてくわしくみていこう。

②……………換金作物栽培の諸相

(1)レモングラスの香油をつくる

格馬の集落に上っていく道は右手が尾根筋の水田であり、左手が斜面いっぱいにはひろがるレモングラス畑である。格馬の人びとはレモングラス⁽¹¹⁾を水はけのよい斜面に植える。この地域ではレモングラスは中国語で香茅草^{しゃんまおつみお}といい、ハニ族はポピ paoqpi とよぶ。育てたレモングラスは鎌をつかって一株ずつ刈りとり、山の中腹にある蒸留施設に運ぶ。運んだレモングラスは蒸留器に入れて蒸

し、草から出る香油を抽出する（図5）。格馬の人びとは抽出したレモングラス油（^{しゃんまおゆー}香茅油）を者米の町で6日に一度開かれる定期市に持って行って換金する。

レモングラスが収穫できる時期は4月から12月までで、花芽が伸びる1月から3月にかけては収穫に向かないという。このレモングラスは1年間のうちに1株あたり4回から5回収穫できる。格馬の人びとは1戸につき2ヶ所から3ヶ所のレモングラス畑をもち、ローテーションで収穫している。つまり1戸に当たり年間8回から15回、レモングラス油をつくって売ることができるのである。



図5 レモングラスの香油を抽出する蒸留器

レモングラスを刈りとって香油を精製

するまでの工程を具体的にみてみよう。筆者は格馬のA氏の家族を対象に2004年7月18日から7月24日にかけて、レモングラスの収穫から香油の精製までを観察し、計量した。

A氏は当時、31歳で妻と小さい娘の3人暮らしだった。作業はA氏とA氏の妻が中心となっていた。筆者の計測によれば、A氏の家ではこのとき、グマロデの山にある5,850m²の畑でレモングラスを刈りとった。刈りとったレモングラスは全部で6,478株で、合計の重さは1,246.6kgだった。刈りとりをして500mほど離れた山の中腹にある蒸留施設までレモングラスの運ぶのに5日間かかった。刈りとりはすべてA氏の妻がとり仕切った。A氏の妻一人では作業ができないので、5日間で1日あたり2人から3人、のべ14人の格馬の女性に1人あたり1日10円で手伝いを頼んだ。A氏はその間、蒸留施設に刈りとった葉を運び、5日目には手伝いにきた女性2人とA氏の妻も一緒に葉を運んだ。また5日目には巴議からレモングラスの蒸留につかう薪を買った。

香油の精製には2日かかり、すべてA氏が一人でした。2日かかりで抽出した香油は13.5kgになった。つまり香油1kgを得るために、レモングラスの葉93kgが必要だったことになる。香油を精製した次の日、A氏は香油を市場に持って行って、レモングラスをとり扱っている者米の買取り業者に売った。レモングラスは買取り業者との交渉の末、418円で売れた。交渉でもっとももめたのは、香油に混じる水の量が何グラムかという問題だった。A氏は香油に水はそもそも含まれていないとして、香油13.5kgでの買いとるように求めた。一方、買取り業者は500gは水だと主張した。結局、容器のなかから水だけを取り出して計量し、香油に含まれていた水が100gだったことになり13.4kgが香油として買いとられた。計量では天秤ばかりをつかうので、メモリのズレをお互いが交渉で修正しようという行為が延々1時間以上とつづくのである（図6）。

このレモングラスの香油1回の抽出にかかった経費をみてみよう。まず雇った女性に払った賃金ののべ14人で、1日1人あたり10元だったので140元になった。また、薪を巴議から買うために140元が必要だった。さらに薪の運搬代のためにトラジ⁽¹²⁾を借りて10元を支払った。これらの経費を引いてA氏の手元に残った純利益は128元だった。

このような香油の精製を年10回程度やるとおよそ1,300元になる。バナナプランテーションの



図6 レモングラスの香油をめぐる値段交渉

業者が入ってくる前の2003年には、格馬の1家族あたりの年間収入は2,000元から3,000元といわれており、3,000元を稼いでいれば格馬では裕福なほうだと言われていた。つまり2003年当時、格馬の人びとはレモングラスを育てて、1年間に1家族が得る現金収入のおよそ半分を稼いでいたのである。格馬村の人びとにとってレモングラスの栽培は現金を得る手段としてもっとも重要視されており、欠かすことのできないものだったのである。

レモングラス栽培がはじまった1995年には、レモングラスの香油は1kgあたり100円で取引されていたという。当時はレモングラスを育てて得る収入がもっと多く、収入もよかったという。実際、レモングラスの栽培がはじまった当初、格馬では定期市に行くために巴議から者米の町まで、およそ4kmを乗るためにだけトラジを買った家族もあった。

レモングラスを栽培しはじめたころは1kgあたり100元していた香油は2004年7月には1kgあたり31.5元まで下がり、当初のおよそ3分の1の値段になった。こうした換金作物の値下がりはこの地域ではしばしばあることで、高収入を期待して栽培をはじめると次第に値が下がり、栽培面積が広がっていくにしたがって商品としての価値が低くなっていくのである。レモングラスは者米郷のなかだけでなく、金平県内の各地や隣の緑春県などでもさかんにつくられており、生産過剰状態になって値が下がったのだという。者米郷のなかでは、者米より西側にすむハニ族はレモングラスをつくりつづけているが、ほかの民族はすでにレモングラスの栽培をやめてしまっている。しかし、いくら値下がりしたとはいえ、格馬の人びとにとってはレモングラスはいまのところ、ほかには換えがたい換金作物になっている。

(2) キャッサバの生産

生業の変化のところでみたように、キャッサバは格馬では古くから重要な作物だったという。ハニ語ではモドゥ moqdel とよぶ。格馬の人びとはキャッサバもレモングラス同様、斜面畑に植えている。ここで植えているキャッサバは毒性がほとんどないという。キャッサバは売ると換金作物になり、また細く切って干して保存すればブタのエサにもなる植物である。また葉は食用にもなり、日々の食卓に上がる。

ハニ族は11月から1月にかけてキャッサバを収穫して乾燥して、さかんに換金する。換金するキャッサバは収穫後、外側の皮をむいて厚さ2cm ぐらいの間隔で輪切りにする。そのあと天日や火で乾燥させる(図7)。2003年12月の調査では、乾燥したキャッサバは500gあたり0.4元から0.6元で取引されていた。キャッサバの値段は集荷量と天気によって日ごとに変わる。春節の前のようにだれもが換金したいと望むようなときにはキャッサバの値段は下がる。もっとも値が下がる

のは、定期市の日である。人びとはキャッサバを業者に売って得たお金をもって定期市に行こうとする。すると、集荷量が増えてキャッサバの単価が下がるのである。また、天気が悪く天日で干すことができなかつたキャッサバは安く買ったたかれる。

巴議の集落のなかにはキャッサバを買いとる業者が2業者ある。格馬の人びとは巴議で換金することが多く、者米の町まで行って換金することは少ない。業者



図7 キャッサバの乾燥風景

が買いつたキャッサバは、この地域では金平などに運ばれて白酒などの蒸留酒の材料となる。

2003年までは生のキャッサバをそのまま売ることができなかった。2004年の冬に幹線道路が舗装されて大型トラックが入ってくるようになると、乾燥させず掘り起こしただけの生のキャッサバを売ることができるようになった。格馬でも手間をかけなくてよいことから、2004年の冬以降は生のキャッサバを売ようになり、乾燥したものを売ることがほとんどなくなった。

格馬の人びとは春節の前にキャッサバを売ってつかったお金のほとんどを者米の町で新年につかう食器や衣服、春節のための食料、爆竹などを買うためにつかう。格馬の人びとはこのキャッサバのお金がなければ、年を越すためのお金がなくなり困るのだという。

(3)うるち米の生産

格馬の人びとは生業の変遷でみたように、集落ができたころから水田をつくって稲作をしてきた。しかし長い間、水田の規模は小さく、水田でできた米が商品として流通するようになったのは1998年以降である。

ハニ族は米を主食としてきた。1980年代の後半までは米は酒をつくるためにもついていた。酒は毎日夕食のときには必ず飲んだといい、格馬の人びとはその酒を各家でつくっていた。1998年以前は主食としての米は十分ではなかったというが、主食としての米が足りないときでも酒を切らすことはなかったという。米の飯を十分用意できないときには子供たちに米の飯を与え、親はキャッサバを食べることが多かったという。

また、ハニ族は年越しや結婚のときなどに餅をつくる。民族的な行事をするときのためにもち米の栽培は欠かせないのだという。

現在、格馬ではうるち米2種類ともち米1種類、合計3種類の水稲を植えている。うるち米はもともとつくっていた在来種1種類とハイブリッド種1種類である。在来種はハイブリッド種に比べて粘り気があり甘味もある。格馬の人びとは在来種のうるち米の味がよいというが、両方とも日常食にする。もち米にはハイブリッド種はなく、在来種だけである。格馬の人びとが植える米のうち、商品になるのはハイブリッド種のうるち米だけである。

格馬のすべての家が2ムー以上の水田に米を植える。水田を全く持たない人もいるが、水田を多

く持つ人から、1 ムーあたり年間 100 元を出して借りてつくる。水田を多く持つ家では 10 ムー以上の水田があるという。数字上把握することができる水田の面積は政府に届けたもののみであり、1980 年代以降に個人が開発した水田については把握できていないし、格馬の人びともわからないという。実際には、帳簿上の面積の 2 倍以上の水田を持っている家もあると予測できる。

格馬の 40 戸すべてが二期作をする。二期作ができるのはゾグロマとグマロデの 2 ヶ所である。ゾグロマはもっとも高いところで標高 850m であるが、この場所でも二期作をしている。ほとんどの家族がゾグロマかグマロデに水田をもっており、二期作をすることができるのだという。逆に、ゾア・ンガロゴ・カグロゾなど谷底にある水田では二期作をしない。

第 1 期目の田植えは 1 月にはじめる。第 1 期にはすべての水田で田植えをする。植えるのは 9 割がハイブリッド種のうるち米である。残りの 1 割はもち米を植える。ハイブリッド種の種もみはすべて者米の町にある種もみ専門店で購入。種もみは毎年新しい種類がでるが、1kg あたり、およそ 17 元から 20 元ほどである。苗床のつくり方には乾いた畑につくるものと水田につくるものがある。ハイブリッド米は政府の指導もあり、すべて乾いた畑につくる。15cm ほどに育ったものを一本ずつ抜いて、水田に植える。1 月から 2 月の初めに植えたものは、5 月には収穫する。

第 2 期目の田植えがはじまるのは 7 月である。第 1 期目に収穫したあと、1 ヶ月半水を湛えたまま水田を休ませる。第 2 期には家で保管していた在来種のうるち米と少量のもち米を植える。第 2 期はハイブリッド種のうるち米は植えない。

米の取引きは格馬のなかです。米を売る先は格馬の南にある上良竹寨のクーツォン族である。上良竹寨のクーツォン族は格馬とほぼ同じ高度の場所に水田を持っているものの、二期作をほとんどしない。足りなくなると格馬などから買っている。

クーツォン族が買いとりにくると、集落の中心にある 1 軒の家の軒下で米の取引きははじめる。米の売買は精米にした状態です。集落内には 2 台のガソリンで動く精米機があり、クーツォン族が米を買いに来ると各々で精米をして米を持ち寄り、計量をして売る。

2003 年 9 月には精米 500g (1 斤) あたり 0.7 元で取引した。このとき、格馬の人びとが売りに出した米はすべてハイブリッド種の米だった。この米のレートは者米の町の定期市での値段をもとにしている。米の値段も、そのときどきに変動しており、500g あたり 0.5 元から 0.9 元ぐらいの間で変動するのだという。レモングラスの例に出てきた A 氏の家は、2003 年 9 月に 500kg の米を売り、700 元の収入を得た。9 月に売るのは、第 2 期の米の収穫が近づき、残りの米を計算できるようになるからだという。第 2 期に植えた米はすべて自分の家で食べるものであり、他人には売らない。

(4)新しい換金作物を導入するいくつかの試み

格馬ではレモングラスの香油、キャッサバ、うるち米を売って現金収入を得る生活が 10 年ほどつづいてきた。この間に香油の値段が 3 分の 1 になるなど、収入は 2002 年ごろから減っていった。

換金作物の値段が下がる一方で、者米の町で売っている食料品や日用雑貨の値段は急上昇した。たとえば豚肉の値段は、筆者が 1 回目に格馬で調査をした 2003 年には豚肉の脂身は 500g あたり 3 元から 4 元だった。それが 2005 年 1 月には 7 元から 8 元になった。物価がおよそ 2 倍に高騰したのである。このような物価の高騰は豚肉に限ったことではない。老集寨郷からやってくるアールー

族が持ち込む野菜の値段も急騰して、者米谷全体で取引きされる食料品の値段が上がった。2002年から2003年にかけての物価の上昇は、^{もんらー}勸拉から者米へ通じる幹線道路の舗装工事が進むのと時をおなじくして起きた。

者米郷のなかで起きた急激な変化に対して、格馬の人びとは新たな換金作物を見つけることで対応しようとしている。2002年から2005年にかけてはパラゴムノキ栽培、草果栽培、バナナの苗栽培という3つの試みがあった。これら3つの換金作物は、いずれもまわりの集落でつくっていたものを格馬に持ってきたものである。

者米郷は正式名称を者米拉祜族郷という。民族の名前を冠した行政単位のなかでは、その民族をもっとも重視することになっており、者米郷ではラフ族の一派とみなされているクーツォン族が重点的に行政の支援を受けている。標高1,000m以上の場所に住むクーツォン族への経済的支援策の一つとして、者米郷では2002年ごろから1,800m以上の土地で草果を栽培することを奨励した。この草果の栽培がうまくいったことで、クーツォン族は年間2万元から3万元の収入を得るようになったのだという。

一方、幹線道路沿いに住むタイ族やチワン族は地の利を生かして、新しい換金作物を次々ととりいれて栽培してきた。タイ族やチワン族はトウガラシやバナナ、野菜などを育てている。タイ族やチワン族はこれらの換金作物を育てることで年間1万元から2万元程度の収入を得ている。

山の上と山の下では換金作物の栽培でうるおうようになった一方で、標高700mから1,000mの比較的低い山地に住む格馬の人びとは年間2,000元から3,000元の収入しか得ることができないままになった。そこで格馬のハニ族たちは街道沿いのタイ族やチワン族、山地のクーツォン族が成功した栽培植物をとりいれて、市場経済化に対応しようとしたのである。ほかの民族の換金作物に興味を示す動きは、両方の民族の集落に挟まれた格馬ではとくに顕著だった。

i. パラゴムノキの植え付け

先にも述べたように、格馬の人びとはレモングラスの畑の一部をパラゴムノキを植えるためにつくり換えている。者米郷のなかでパラゴムノキの導入が早かったのは者米の町より東側の幹線道路沿いの集落である。者米の町より西側にパラゴムノキが広まったのは2000年ごろからだという。

巴議集落では2002年ごろから水田の一部にパラゴムノキの苗木を植えて、パラゴムノキのプランテーションをつくる準備をしていた。2004年の冬ごろから植え替えをはじめ、2004年11月ごろから2005年3月ごろにかけてプランテーションをつくる土地を開墾していった(図8, 図9)。この巴議の動きに合わせるようにして、格馬でもパラゴムノキを植える動きが広がった。パラゴムノキの苗は巴議から買ったものをつかい、斜面畑に植えた(図10)。パラゴムノキの植え付けは日当たりのよい畑ならどこにでも試みられており、標高800mの場所の山の斜面にも植えている。2005年までに10戸がパラゴムノキを植えた。しかし、まだどの家も苗木は1m程度で、樹液を採集するまでには至っていない。

ii. 草果栽培の試み

クーツォン族が草果を育てることに成功すると、格馬の人びとは草果の根っこをもらい受けて、



図8 パラゴムプランテーション整地前の巴議の森
(2003年11月撮影)



図9 パラゴムプランテーション整地後の巴議の森
(2005年3月撮影, 図8と同一地点)



図10 レモングラス畑に植えられたパラゴムノキ

集落のなかにある小さな畑，キッチンガーデンに植えて試した。一般的にこの地域では，草果は1,800m以上の高地にしか育たないといわれている。格馬の人びとはそれを標高570mから1,100mの集落の土地のなかで育てようとしたのである。試みはことごとく失敗し，格馬の土地のなかで草果が育つことはなかった。現在は，格馬の2戸だけが1,800mの山に出かけて行って草果畑をつくっている。

草果が格馬で広まらなかったのは，一つには草果を育てる場所が遠すぎると判断されたことと，クーツォン族との土地の競合があったためである。草果を育てる1,800m以上の山は格馬からはラバに乗って6時間かかる。一度出かけたなら，山に泊まり込まなければならないなど，不便を強いられるのだという。また草果が植えられるようになった当時，格馬にはラバを買う財力をもつ人が少なかったことも影響したのだという。ラバは行きに乗っていただけではなく，育てた草果を集落にもっておいでしてくときの運搬にもつかう。

2005年現在で，ラバを手に入れた格馬のハニ族は2戸だけである。ラバの値段は水牛1頭半分，6,000元程度だという。水牛1頭は4,000元程度であるが，余分に水牛を持つ家はほとんどなく，水牛を手放してしまうと，水田での田起こしに困ることになる。格馬では水牛を2頭以上もつ家はほとんどなく，事実上，ラバを買うことが難しかったのである。

iii. バナナの苗栽培

バナナの苗栽培は2005年3月に2戸がはじめた。2004年の秋から者米地域にバナナ業者が入り込むようになった。バナナプランテーションが広がるにしたがって，バナナ業者はバナナの苗を地

元の人びとから買いとって植えるようになった。巴議ではバナナの苗を栽培するとよいお金になるという話が広まり、水田の一部にバナナの苗床をつくるようになった。

格馬で最初にバナナの苗を栽培するようになったのは、巴議のタイ族と姻戚関係にある家の息子である。巴議に妹を訪ねていったところ、その家でバナナの苗が1本あたり3円で売れると聞いて、それまで藪になっていた休耕地を急きょ焼いて畑をつくった。

(5)格馬の商品作物にかかわる生業活動から見てくるもの

ここまで、格馬の人びとの生業活動についてみてきた。者米という雲南省の最南端に位置する小さな地域でも、市場経済化の波は急激に入り込みつつある。こうした地域の経済的、社会的状況の変化に対して、格馬の人びとも積極的に商品経済に適応しようと試行錯誤をくりかえしている。

はじめに述べたように西谷は、この地域では市を介することで各民族が戦略的に生業の差異化を図ってきたことを指摘している〔西谷 2007〕。そして、「市を介することで自給自足的な1つの生活世界の形成を可能にしてきた」〔西谷 2007: 315〕と論じた。

者米という地域を全体的にみると、たしかに西谷の指摘する通り各民族が生業を違えることによって分業した世界をつくりあげている。ところが格馬をみると、この集落の生業は者米谷という生活世界になんら生産物を供給していない。格馬の人びとがつくる換金作物は、者米谷のなかで流通するものではなく、大都市に運ばれて嗜好品や工業製品になるものである。言ってみれば、彼らがつくる換金作物は世界経済の一翼を担うものである。それはレモングラスだけでなく、新しくはじめようと試みているパラゴムノキ栽培やバナナ栽培も同様である。格馬の人びとが者米谷の経済に貢献しているのは、定期市で金銭をつかうことぐらいである。つまり格馬の人びとは、者米の定期市では生産物の提供者ではなく、もっぱらお金を払ってものを買うだけの消費者なのである。

多くの集落ではそれぞれ、集落ごと、民族ごとに差異化をはかって野菜を生産したり、とれた野草を採取したりして定期市に持ち込んでいる。同じハニ族でも牛籠の人びとは換金作物の生産をする一方で、木工品⁽¹³⁾、藍⁽¹⁴⁾、藍染にした布⁽¹⁵⁾などをつくっている。このように、多くの集落では定期市に自分のところでつくった谷の人びとに必要な商品を持ち込んで売り買いをしている。者米谷において集落ごと、民族ごとの生業の差異化が進むなかで、格馬の人びとがとった戦略は大都市向けの換金作物に徹底的に依存するというやり方だったのである。

しかし格馬のやり方は必ずしも成功した訳ではない。一時的にみれば、レモングラスの値段がよく、トラジなどの高価な買い物をすることができたときもあった。しかし一度レモングラスの値段が崩れると収入が極端に減り、現金を媒介とする消費生活にばかり頼っているわけにはいかなくなってしまう。

1990年ごろにはレモングラスは者米郷のいたるところで植えられていた換金作物だった。たとえば者米の町の東の山中にあるヤオの集落では、すでにうち捨てられたレモングラスの畑の跡をみることができる。ハニ族以外の少数民族はレモングラスをあっさりあきらめ、新しい換金作物に替わっていった。しかし格馬の人びとはいろいろな新しい換金作物を試してはいたものの、その試みは実らずレモングラスをつくりつづけることになったのである。

以下ではこうした商品作物の導入の一方でつづけられてきた可食野生動物の利用について、食

生活に注目してくわしくみていこう。

③……………食生活における食材獲得手段

格馬の人びとは換金作物を育てて現金収入を得る一方で、換金作物をつくるための空間でいくつもの可食野生動植物をみつけてたくみに食生活のなかにとり入れてきた。格馬の人びとは可食野生動植物を殺したり除いたりして排除するのではなく、残しておいて積極的につかってきたのである。可食野生動植物を積極的につかう彼らの活動は市場経済化が進む経済的・社会的状況の変化のなかでもまだ重要な位置をしめている。以下では市場経済化に対する格馬の人びとの対応を食生活に注目してみたい。

(1)日々の食事の事例

格馬の人びとの食事はおおまかにわけて2種類ある。一つは日常的な食事であり、もう一つは儀礼を伴う食事である。じつは儀礼をする食事は意外に多い。以下では、日常的な食事と儀礼をするときの食事についてそれぞれ概観しよう。

i. 日常的な食事

格馬の人びとは毎日、米を主食としてブタの脂をつかった炒め物や炒め物に水を足したスープを副菜として食べる。彼らは基本的に朝と夜の2回食事をして、毎食2品から4品の副菜をつくる。

図11は日常的な食事の一例である。一食分の食事の副菜である。図11にある副菜はジャガイモと豚肉の炒め物、青菜のスープ、小豆ペースト、バッタの炒め物である。この図にあるもののほかに、食事では毎回、酒とうるち米のご飯を食べる。



図11 八二族の食事の一例

図11の4種類の副菜を食材を入手した場所でわけてみよう。まず、ジャガイモとブタの炒め物にはジャガイモ、ブタ肉、ラード、塩、化学調味料、トウガラシの6種類の食材をつかっている。青菜のスープでは青菜とラードの2種類をつかっている。また小豆ペーストではササゲ豆と塩と化学調味料とトウガラシの4種類、バッタの炒め物ではバッタとラード、塩、化学調味料、トウガラシの5種類をつかっている。全部で9種類の食材をつかっており、このうちのジャガイモ、ブタ肉、ラード、塩、化学調味料、トウガラシ、小豆の7種類は定期市で購入したものであり、青菜が栽培したもの、バッタは水田のまわりで集めてきたものである。

基本的に味付けは塩と化学調味料、トウガラシだけである。何にでも大量のトウガラシを入れて辛くして食べることが好まれる。トウガラシが少ないと、味が足りないと

言ってわざわざ足すことも多い。トウガラシ以外の香辛料はほとんどつかわない。定期市ではおよそ 80 種類の香辛料が売られているが、春節や結婚のときに振る舞う料理に八角やコショウをつかうくらいで、日常生活のなかでトウガラシ以外の香辛料をつかうことはほとんどない。

彼らの食材のなかに保存食はほとんどない。保存食といえそうなものはタケノコを壺のなかに入れておいて発酵させた酸筍だけである。これも数日で食べてしまうので、保存食と呼べるほどのものではない。

米はほとんど自給する。一部の家では米をほかの民族に売りすぎて足りなくなり、兄弟から買ったり、定期市に行って買ったりすることもある。米は大量に食べる。老若男女にかかわらず、一食につき米を茶わんに 3 杯以上食べるのがふつうである。彼らは米を釜で炊いたあと乾かし、蒸し器で蒸して粘り気をなくしたものを好んで食べる。あまり粘り気がある米を好まないのだという。

米とともに、毎食出てくるものが酒である。酒は定期市で買う。酒を飲むのは男性である。格馬の男性にとっては「ご飯を食べること」は「酒を飲むこと」とほとんどおなじことを意味する。夜だけでなく、仕事をはじめる前の朝の食事のときにも飲む。女性は一般的に日常は飲まない。女性でも年長者の一部は日常的に酒を飲むが、一般的には女性が酒を飲むのは婚礼や春節のときだけである。

酒は現在ではすべて定期市で買うが、1989年に定期市が再整備されるまでは各家でつくっていたという。当時は毎食分の酒を用意することはできなかったという。毎日酒をつくり、夜にはほぼ毎食飲んでいたという。1980年代後半に県都である金平から者米への道が整備されて車が通るようになると、金平でできた酒が車で運ばれてくるようになった。この酒は蒸留酒で、500mlあたり1元程度である。値段が安いうえに、アルコール度数も高く人びとに好まれた。格馬の人びとは各自で酒を造るのをやめて、定期市で買って酒を飲むようになった。そして飲む回数も夜の1回から朝と夜の2回に増え、毎回食事のときには欠かさず飲むようになった。

格馬の人びとは定期市の日にはポリタンクを持って山を下り、酒を量り売りしてもらって帰る。1週間のつもりで買っているものの、たいてい2、3日で飲んでしまう。集落には酒、タバコ、洗剤、塩、化学調味料、菓子類、鶏卵などを売る雑貨商をする家が2軒あり、飲み干してしまうとそこに酒を買いに行く。

毎食の飲酒を格馬の人びとは「民族的習慣」だという。歴史的にみると、格馬の人びとが酒を毎回の食事のときに酒を飲むようになったのはそれほど古いことではない。現在ではタイ族や漢族は金がないのにハニ族を大酒を飲む民族だと語るようになってきている。少なくとも、こうした大量に酒を消費する「民族的習慣」は定期市の存在があってこそ成り立っている。

ii. 儀礼をするときの食事

儀礼をするときの食事でもっとも特徴的なのは、ニワトリやアヒル、ブタ、イヌ、水牛という家禽類や家畜類を食べることである。ニワトリをもっともよく儀礼につかい、つづいてアヒルをよくつかう。ブタは春節のときや婚礼のときにつかうが、そのほかではほとんどつかわない。イヌや水牛をつかうことも非常にまれである。家禽類や家畜類を除けば、儀礼をとまなう食事では日常に食べるものは日常的に食べるものと変わらない。

家禽類や家畜類はすべて、家で育てるものである。飼っている動物は、日常の食事のなかではほとんど食べない。日常で家禽類や家畜類を食べるのは、飼っていた動物が病気などで死んでしまったときだけである。ただし、じつは格馬の人びとはしばしば儀礼をしており、家禽類や家畜類を食べる機会は意外に多い。

もっとも頻繁にする儀礼はネハトゥ *neivqhaltul* (祭鬼) とされる儀礼である。この儀礼は家の人が病気になったときや家での問題が起こったときなどに度々とりおこなう。ほかに、田植えのときや収穫のとき、畦直しのときなど、水田にかかわる作業のときや婚礼、春節、集落の神である寨神を祀るときなどに儀礼をする。

どの儀礼のときにも飼っている動物のどれかを殺して水煮にする。ニワトリやアヒルでは、水煮にした頭や両足をつかって行く先を占う。占いでは鶏冠の形、鼻の穴の開き具合、目の開き具合、足の丸まり方などを観察して、行く末を占う。占いは一人ではなく、儀礼に参加した人びとのなかで年をとった人や集落のなかで役についた人などが代わる代わる手にとって観察する。

実際どのように占いをするのかについて一例を示そう。筆者が調査を終えて帰るとき、世話になった家でニワトリを用意して煮て、筆者の帰国の道中を占ってくれた。目の開き具合、鶏冠の形、鼻の穴の開き具合、目の開き具合ともに問題はなかったが、足の丸まり具合が悪かった。彼らは「無事に家に帰ることができるが、足のことで何か苦しむことがあるかもしれない」という結論を出した。このとき筆者は椎間板ヘルニアの症状が出ており、その状況に合わせた占いがでた。

こうした占いはあらかじめ多くの操作をする。ニワトリをゆでる前に鼻の穴をナイフで広げたり、ゆでている途中に足の形を整えたりする。とはいえ、ニワトリやアヒルをつかった占いは田んぼの状態や田植えのあとの稲の生育状況など未知のことを予知するための手段になる。また病気や家庭の不和など困ったことが起こったときには、ニワトリやアヒルの頭や足をつかって見立てをすることで、将来の振る舞いに対する指針にもする。占いは1年のうちに必要に応じて何度となく繰り返す。

儀礼以外でも、遠くから客がやってきたときや、遠くに客が帰っていくときなどにもニワトリやアヒルを料理して歓待する。格馬の人びとは頻繁にニワトリやアヒルなどをつかうが、彼らはニワトリ、アヒルなど家禽に卵を産ませて孵化させたり、ブタに子供を産ませるなどの再生産活動をほとんどしない。一般的に家禽類、家畜類は定期市でヒヨコの状態や子豚の状態を買ってくる。つまり、格馬の人びとは家禽類や家畜類については増やすことにはあまり興味がなく、肥育することを重視しているのである。

2005年1月から3月にかけて筆者が観察したところでは、格馬の40戸のうちでブタに子供を産ませてふやしていた家は3戸にすぎなかった。またニワトリを卵から孵化させて育てていたのは1戸のみだった。一方、アヒルは全く再生産していなかった。春節のあと、集落内にはほとんどブタがいなくなってしまう、40戸のうち37戸が定期市で新たに子ブタを買い直したのである。

さらにニワトリやアヒルは儀礼でよくつかうため、自分の家で飼育するだけでは間に合わなくなってしまうこともある。旧暦の2月にする寨神を祀る儀礼アマトゥ *hhaqma tul* (祭寨神) のときには、40戸のうち28戸で育った儀礼につかうのに手ごろなニワトリやアヒルがなく、定期市で大きくなったものを買って足した。

家禽類や家畜類はいわゆるハニ族らしい民族的儀礼と彼らという活動でつかうものであり、格馬

の人びとの生活にとっては欠かせないものである。しかし格馬の人びとはこの民族的儀礼に欠かせない家禽類や家畜類も換金作物をつくって換金した金銭で買うという選択をしている。

(2)入手方法による食材分類

ここまで、格馬の人びとの食事を概観してきた。以下では、格馬の1戸を対象にした73回の食事内容調査をもとに、格馬の人びとの食生活の傾向をくわしくみていこう。調査の対象としたのはレモングラスの抽出とうち米の販売の事例として示したA氏の弟B氏の家族である。データは2004年7月16日から9月24日にかけて断続的にのべ43日、73回の食事を対象にしたものである。

B氏はB氏の両親、小学校3年生になるB氏の娘の4人家族である。B氏の妻はB氏の娘を生んですぐに亡くなっており、B氏の母親が女性の仕事を一手に引き受けている。定期市で食材を買うのはほとんどB氏がする。また、畑で野菜を栽培したり、可食野生動植物を採集するのはおもにB氏の母親であり、そのほかにB氏とB氏の娘がたまにそれぞれ採集することがある。

73種類の食事でB氏家族が食べた食材は63種類である。この63種類の食材には、毎回の食事で必ず出てくる米、酒、ラード、トウガラシ、塩、化学調味料の6種類が含まれている。この6種類のうち、米は栽培して入手したもので、あとの5種類は定期市で手に入れたものである。以下では、この毎回出てくる6種類を除いて、副食につかう食材のみについて検討する。

B氏の家族が入手した57種類の食材を入手手段に注目すると①定期市で買ったもの、②飼育または栽培したもの、③狩猟または採集したものの三つのカテゴリーにわけられる。それぞれのカテゴリーの内訳は、①の定期市で買ったものが14種類、②の飼育または栽培したものが28種類、③の狩猟または採集したものが15種類となった(表1)。登場した回数は73回中、①が41回、②が72回、③が39回だった。

表1 入手手段ごとの獲得食材

入手手段	品目
定期市で買う	ブタ肉、鶏卵、豆腐、湯葉、シイタケの石突き、酸菜、即席麺、小麦乾麺、ジャガイモ、白菜、モヤシ、ハヤトウリ、ニンニク、ラッキョウ
飼育・栽培する	ニワトリ、アヒル、ブタ、トウガラシ、ラッカセイ、キャッサバの葉、カボチャ、カボチャの葉、ヘチマ、ニガウリ、ニガウリの葉、ミズイモの茎、ミズイモの新芽、パパイヤの実、青菜、ニラ、シソ、ナス、ササゲ、ササゲの葉、タケノコ4種(芳名アモアデュ、ハマドボアデュ、アツォアデュ、ハスアデュ)
狩猟・採集する	ティラピア、タウナギ、タニシ、ゲンゴロウ、ヤゴ、バッタ、幼虫(種不明)、カエル、ナンゴクデンジソウ、ドクダミ、クワレシダ、ムラマサヅン(芳名、種不明)、キクラゲ、ネズミ類(種不明)

観察より作成

B氏の一家が食べた食品をみると、もっとも多いのが飼育または栽培して手に入れたものだったことがわかる。ほぼ毎回の食事に登場していた。一方、定期市で買ったものと狩猟または採集して得たものは種類数、登場回数からみるとほぼ同じだった。73回の食事で3つのカテゴリーにわけたものをすべて食べた回数は7回であり、あとは①か③のどちらかが②といっしょに食事に登場していた。つまりB氏の家の食事からみると、飼育または栽培したものと定期市で買ったものを組み

合わせるか、もしくは飼育または栽培したものと狩猟・採集で集めたものを組み合わせるのが一般的な食事だといえる。以下では、それぞれのカテゴリーについてくわしくみてみよう。

i. 定期市で買ったもの

定期市で買ったものは表1に示したように14種類である。14種類のうち、ブタ肉と鶏卵はタイ族やヤオ族など、者米谷に住む人びとが育てて市場に持ち込んだものである。また14種のうち、加工品は豆腐、湯葉、シイタケの石突き、酸菜、即席麺、小麦乾麺の6種類である。

豆腐は者米谷で作られたものである。そのほかは金平などから持ち込まれる加工品である。残りの6種類は野菜類である。ジャガイモは金平など者米谷の外から持ち込まれ、者米の町に住むタイ族が売り子として売ったものである。そのほかの白菜、モヤシ、ハヤトウリ、ニンニク、ネギの5種類は老集寨郷のアールー族が集落で育てて、者米の定期市に持ち込んだものである。

ii. 飼育または栽培したもの

飼育または栽培したものは28種類である。この28種類のうちで栽培したものについては、同じ植物種であっても、用途をわけてつかっている葉と実などを別の種類として数えた。28種類のうち、飼育したものはニワトリ、アヒル、ブタの3種類である。また、栽培したものは25種類あった。植物種で数えると22種類である。

ニワトリ、アヒル、ブタはすべて定期市で小さいものを買ってきて育てたものである。ニワトリとアヒルはB氏の家の入り口で竹かごに入れて飼っていたものである。ブタもニワトリやアヒルと同じように、B氏の家の入り口に囲いを作って育てていたものである。

ニワトリとアヒルはすべて前に述べたとおり、儀礼をする食事で食べたものである。B氏の家では73回の食事のうち、7回儀礼をした。この7回の儀礼はB氏の父親のために執り行なったものである。B氏の父親は足が痛く、具合が悪化して足を引きずるようになったので、それを治す目的で儀礼をした。

一方、栽培植物についてみると、B氏の家で食事につかった25種類のうち、タケノコ類を除く21種類はキッチンガーデンで育てたものである。野菜は水田や斜面畑の一部をキッチンガーデンにして育てている。B氏の家では、ンガロロゴにキッチンガーデンを持っており、カボチャやニガウリ、ヘチマ、ラッカセイ、ミズイモ、ニラ、ナス、ササゲ、ショウガ、ニンニク、ラッキョウ、青菜などを育てている。また水田の端の空き地にシソやパパイア、トウガラシなどを植えている。

タケノコは畑に植えたバンブーの株からとってきたものである。バンブーの株はそれぞれの家で育てて管理している。B氏の家では4種類のバンブーの株を持っている。バンブーは家の建材や道具など、さまざまなものに加工してつかう。食料としてつかったタケノコは、株の芽の一部を採集ものである。

iii. 狩猟・採集したもの

B氏の家で73回の食事のなかで食べたもののうち、表1にあらわしたように15種類が採集した食材だった。15種類のうち、ティラピア、タウナギ、タニシ、ゲンゴロウ、ヤゴ、カエル、バッタ、

ナンゴクデンジソウ、ドクダミ、クワレシダ、ムラマサヅン（芳名）の11種類は水田のなかやまわりで集めた食材である。一方、その他の4種類のうち、幼虫は畑に生える樹木の股からとってきたものであり、ネズミ類は家で走っていたものを手でたたき落としたものである。またキクラゲと芳名ハチアデュと呼ばれるバンブーのタケノコは上良竹寨の土地にある森のなかからとってきたものである。

B氏の家で狩猟・採集したものの多くは、水田で育ったものだった。以下では、格馬の人びとの水田での狩猟・採集に注目したい。

④……………水田における可食野生動植物の集め方

格馬の人びとは水田のなかやまわりにすむ動物や生えてくる植物を積極的につかう。以下では水田に生息する動植物に注目して、野生動植物が育つことを可能にしている条件と格馬の人びとの狩猟や採集の活動をみていこう。

(1)可食野生動植物が育つ水田環境

格馬の水田には年間を通じて、多くの可食野生動植物が生息する。この可食野生動植物の成育環境を結果的に支えているのが、水田の管理の仕方である。格馬の水田は年間を通じて水を湛えたままにする。水が不足するなど、水の供給に問題がなければ水田の水を絶やすことはない。この通年湛水は、この地域で広くおこなわれている水田の管理の仕方である。

この地域の棚田はのり面がすべて土でできている。この土ののり面を維持するには、通年湛水が適当な方法となっている。この梯田ののり面は一度水田が干からびると無数のひび割れができ、水漏れの原因となる。水田を復旧させるために水を入れるとひび割れから水が漏れ出し、水田に水が溜まらないなどの困難が生じる。水漏れが起こるだけでなく、ひび割れた部分は強度が弱まって梯田の段が崩落する原因にもなる。こうしたリスクを避けて水田を維持する方法として、水田をつかわないときにも水を入れたままにするのが一般的である。

このような水田の運用は、結果的に豊かな生物の生息環境を育んでいる。水田内部やそのまわりでは可食野生植物が生え、水が満ちた水田のなかではタウナギやかつて放流されたティラピアなどが生息する。こうした可食野生動植物が多く育つ環境は自然発生的にできているわけではない。もちろん、通年湛水をする水田は野生動植物が生息しやすい環境にあるというのは間違いない。しかし野生動植物が食べられるものであっても、人びとが有害動物や雑草などとして排除の対象にしてしまえば、それらは有用な資源としてはつかわれなくなってしまう。つまり格馬の人びとが水田に生息する可食野生動植物を食料にしているのは、彼らがそれらの動植物に価値を見い出して、排除しないようにしているからである。

格馬の人びとは水田の可食野生動植物を畦直しや田起こしなど、水田にかかわる作業の合間や畑での作業の帰り道、子供たちの遊び、大人の遊びなどさまざまな場面で集めている。以下では、水田内にすむ野生動物と水田内や水田のまわりに生える野生植物にわけて格馬の人びとの狩猟採集をみていこう。

(2) 野生動物のとり方

水田にはティラピア、タウナギ、タニシ、ゲンゴロウ、ヤゴ、カエルなどの野生動物がいる(図12)。格馬の人びとは年間を通じて水田やそのまわりの可食野生動植物をとるが、とくに水田に稲



図12 水田でとったティラピア・タウナギ・ゲンゴロウ

が植わっていない5月半ばから7月にかけてと11月半ばから1月にかけてはさかんにとる。

とる場所は稲が植わっていない時期には誰がどこでとってもよい。稲が植わっている時期には、他人の水田ではとらないことになっている。とはいえ、稲が植わっているときに水田のなかのものをとってはいけないというのは、語り上の問題であって、実際にはかなり自由に動物をとる。仮に誰かが水田に入り込んで

とっていたとしても、咎めることはほとんどなく、「稲を傷つけるな」という程度である。以下では、それぞれの生物のとり方についてみよう。

i. ティラピアのとり方

ティラピアのとり方は水田のなかを泳いでいるものを手ですくい取る方法と、水田の水を抜いて泥の上で身動きできなくなっているものを手で拾う方法の2つがある。

水田のなかを泳いでいる生き物をとる方法は、とくに女の子の遊びをかねた採集活動で多くみられる。稲が植わっていない季節に水田のなかにはいって、泳いでいるティラピアを手ですくいとっていくのである。

一方、水田の水を抜いて泥の上で身動きできなくなっているティラピアをとる方法は、田起こしのときや農作業の帰りなどにする(図13)。1月や7月にする田起こしのときには畦の一部に溝を



図13 田起こしをする人について魚を拾う

つくって水田のなかの水を捨ててから、水牛をつかって水田のなかの泥をかき回す。水田の泥をかき回すと、ティラピアは泥の間に挟まって身動きがとれなくなる。これを拾い集めていくのである。人びとは田起こしをしている格馬の人びとの水田ならどこにでも出かけていき、田起こしをしている人の後ろについてティラピアを拾う。誰が行っても魚を拾うことを拒まれることはない。

田起こしの場合とは違い、魚をとる目

的だけのために水田の水を抜くこともある。水田の水を抜くとり方は水田に稲が植わっていないときに限られる。魚が育ったと思う頃合いを見計らって自分の水田に出かけていき、畦を切って水を抜いて、泥の上で跳ねるティラピアを拾うのである。このとり方では1時間もあればすべて終わってしまう。一度にいくつもの水田の水を抜くことはなく、これと狙った1枚の水田でやるだけである。このやり方は農作業の帰りなどにやっている。

ティラピアをとるのは格馬の人びとがつかう水田のなかだけであり、隣の集落の水田やほかの民族の水田にでかけてとることはない。

ii. タウナギのとり方

タウナギは田んぼの畦に穴をあけてそのなかに潜んでいることが多い。タウナギの場合、泥にはまりこんだものをとるやり方もあるが、その他に畦を踏んで穴の感触を確かめて、手で引っ張り出すやり方や仕掛けをしかけておいてとるやり方がある。泥にはまりこんだものをとるときはティラピアとおなじように素手ですくってとる。

田の畦にすむタウナギをとる方法は、畦直しのときや梯田ののり面の雑草をとり除く作業をするときなどにする。また、子供たちが遊びをかねてとることもある。タウナギが穴を開けた部分は柔らかくなっており、両足で畦の感触を確かめると、隠れている場所がわかるのだという。隠れている場所がわかると、その部分に手を入れて隠れているタウナギを引きずり出す。

仕掛けは男性が遊びでつかっている。仕掛けはバンブーを細く割いたものをつかってつくっており、高さとは幅は10cmから15cm程度のものである(図14)。ミミズなどのエサを用意して水田に一晩仕掛けておくと、一つの仕掛けのなかに10匹から15匹ぐらいのタウナギが入る。格馬では仕掛けをつかう魚はこの1種類のみである。仕掛けも1種類しかない。



図14 タウナギの仕掛け漁の準備

仕掛けを置く場所は、格馬のなかでは自分の水田が中心である。仕掛け漁はほかの集落の水田でやることもある。とくにクーツォン族の水田にはさかんに仕掛け漁にでかける。格馬のハニ族や巴議のチワン族、タイ族は好んでタウナギを食べるというが、クーツォン族はほとんどタウナギを食べないのだという。クーツォン族がタウナギをとらないため、クーツォン族の水田は格馬の人びとにとって格好のタウナギをとる漁場になっているのである。

iii. その他の水棲生物のとり方

以下ではタニシ、ゲンゴロウ、ヤゴ、カエルのとり方をみていこう。

タニシとりは田起こしのときや畦直しのときのほか、農作業の帰りや女の子たちの遊びをかねた

狩猟・採集活動でもよくする。タニシとりはティラピアとりのように水田の水を抜く必要がなく、手軽な漁である。水田のタニシは泥のなかに潜っている。よくみると、泥の表面に小さな穴が開いており、気体がでていいることもある。その場所を指で掘るとタニシをとることができる。タニシとりは子供から大人まで誰にとってもできるもので、老若男女を問わず、農作業の合間や集落に帰る道すがらにする。ゲンゴロウ、ヤゴなどのとり方もタニシと同じである。ゲンゴロウをとると、すぐに頭を爪で引っかけてとり除いておく。

カエルは夕方にとる。7月から9月にかけては水田にカエルが多く生息する。暗くなってから懐中電灯を照らしてつかまえる。カエルとりに行くのは男性の大人と子供だけであり、女性がカエルとりにいくことはない。

(3)野生植物の集め方

格馬の人びとが水田のなかやまわりでとる野生植物はナンゴクデンジソウ、ドクダミ、クワレシダ、芳名でムラマサゾンと呼ばれる植物などである。種類はそれほど多くないが、食事には頻繁にでてくるものである。可食野生植物をとってくるのはほとんどが女性か小学生以上の子供たちである。成人の男性がとる機会はきわめて限られている。成人の男性が可食野生植物をとるのは、作業小屋で田植えや畦直しなどの仕事のあとの宴席を設けるときにおかずが足りない判断したときぐらいである。

女性たちはレモングラスの作業の合間などに5分から10分ぐらいかけて植物採集をする。

斜面畑での仕事が終わったあとに水田に出かけていって、おかずになる可食野生植物をとってくることも多い。また、小学生ぐらいの小さい子供たちや若い結婚前の女の子たちは5人から10人ぐらいが集団になって水田に出かけていき、植物採集をする。



図15 水田一面を覆うナンゴクデンジソウの群落

ナンゴクデンジソウは谷間を流れる小川沿いの水田に多く生える。7月から8月にかけて多くとる(図15)。ナンゴクデンジソウは引き抜くと根も葉も一緒にとれる。とったナンゴクデンジソウは根も葉も区別せずに食べる。

ドクダミは梯田ののり面に多く生え、1年を通じて採集する。ドクダミで食べる部分は根である。ラッカセイやトウガラシをあえて食べることが多い。儀礼のときには動物を血抜きしてためておいた血を攪拌して固めたものにパクチーなどの香草と一緒に混ぜて食べることもある。

クワレシダは水田のまわりの湿った場所にはえており、1年を通じて採集する。クワレシダはラードをつかって油炒めにすることが多い。筆者が同行して調査をしていたなかで、成人男性が採集した唯一の可食野生植物がこのクワレシダだった。また芳名でムラマサゾンとよばれる植物は、水田に引き込む水路に生えている。このムラマサゾンは近年までなかった植物で、2000年ごろから格馬でも生えて

くるようになったのだという。

水田での植物採集は基本的には格馬の人びとがつかう水田のなかやまわりでしている。けれども、基本的にこれらの植物はどこでとってよいものである。格馬の水田でとっているのは仕事の帰りに寄ることのできる近い場所に格馬の水田があるからである。水田には大量に可食野生植物が生えており、採集には事欠かない。作業をクーツォン族の水田の近くでするときには、自由にクーツォン族の水田に入って採集をすることもある。逆に、ふもとのタイ族などほかの民族が格馬の水田にやってきて採集をすることもありますが、これも許されている。

(4) 狩猟・採集活動の範囲と特徴

格馬の人びとの狩猟・採集の活動場所はとくに決まりがないことが特徴である。おもに、狩猟・採集をする場所は格馬の土地のなかであるが、基本的には誰の土地でやってもよい。自分の水田でも採集活動をするが、親族関係にない人びとの水田に入って行って狩猟や採集をしてもそれが問題になることはない。

狩猟・採集の活動は集落の土地を越えてもおこなわれる。格馬の人びとはしばしばクーツォン族の水田に行ってタウナギやタニシをとる。クーツォン族の水田への狩猟・採集の活動は格馬の水田でタウナギやタニシをとり尽くしてしまったあとにすることが多い。

クーツォン族の水田が格馬の人びとの格好の狩猟・採集場所になっているのは、前にも少し触れたようにクーツォン族が水田の可食野生動植物を積極的につかっていないからである。ハニ族の話によれば、クーツォン族は草果で大金を手にするようになってから、以前ほど積極的に可食野生動植物を採らなくなったのだという。さらに可食野生動植物の種類によっては、民族的習慣から食べないものがあるのだという。

格馬のハニ族は好んでタウナギを食べるが、上良竹寨のクーツォン族はタウナギを食べない習慣なのだという。格馬の人びとは「クーツォン族はタウナギを食べられない。彼らはタウナギを食べてはいけない習慣があるからだ。タイ族とハニ族はタウナギを食べる。こんな美味しいものを食べないクーツォン族はかわいそうだ」という。

筆者の観察によれば、クーツォン族が一般的にタウナギを食べない訳ではない。たとえば、格馬にある1戸のクーツォン族の家族はハニ族と一緒にタウナギを食べている。また上良竹寨ではタウナギを食べないというが、べつのクーツォン族の集落にはタウナギをとるための仕掛けがあり、決して民族的習慣とは言えない。ただし上良竹寨のクーツォン族はたしかに「タウナギは気持ち悪くて食べられない」と答えるし、タウナギをとっている場面に出くわしたことはない。

いずれにしても、上良竹寨のクーツォン族が可食野生動植物をそれほど食べないということが、結果的に格馬の人びとの狩猟・採集の活動範囲を広げていると考えられる。一方で、ほかの民族が格馬の土地に入り込んで、可食野生動植物をとることも許されている。

こうした狩猟・採集活動は最初にも述べたように、人びとが可食野生動植物を排除せず、利用価値を見いだしたことで可能になっている。結果的に、水田は稲を育てるための一義的な空間としてではなく、「野菜畑」や動物の「蓄養場」としての多義的な空間になっているのである。

このような多義的な空間は本稿ではここまで述べてこなかったが、水田だけでなく畑にも広がっ

ている。レモングラス畑には馬蹄菜という野草が生えており、これも格馬の人びとの採集の対象になっている。

⑤……………考察—市場経済化を支える可食野生動植物利用

ここまで格馬の人びとの生活を、換金作物の栽培と食生活にみる可食野生動植物の利用という2つの側面からみてきた。本稿では格馬の人びとが市場経済化の流れに対して、一方で徹底的に大都市向けの換金作物に依存するという戦略をとりつつ、一方で換金作物を育てる田畑を「野菜畑」や動物の「蓄養場」としてつかうことによって対応してきたことを述べた。

(1)大都市向けの換金作物に依存する生業戦略

換金作物の栽培のところでみたように、格馬の人びとは換金作物の栽培に特化することで、者米谷地域の市場経済化に対応しようとしてきた。その時々にもっとも換金しやすい換金作物を試行錯誤するなかで、確実に換金できるレモングラスとキャッサバの栽培をつづけてきた。一方で格馬の人びとは積極的に新しい換金作物をとり入れて栽培しようとしている。本稿の「2 換金作物栽培の諸相」で述べたように格馬の人びとは、パラゴムノキやバナナの苗を育ててみたり、草果を栽培してみたりというように新たな換金作物の栽培を試みている。そのほかにも地方政府に掛け合って、クスノキ科の植物の苗を手に入れて斜面畑に植えている。この植物はおそらくシナモンである。しかしパラゴムノキもバナナの苗も2005年には成果が出ておらず、草果の栽培では失敗してしまった。またクスノキ科の植物は畑の片隅で大きく育っているものの、商品として売り出すことができずに放置されたままになっている。

格馬の人びとが導入した換金作物は、換金に成功しているレモングラスやキャッサバも、そのほかの未だ換金に成功していない植物もすべて、者米郷と老集寨郷という限られた範囲のなかでの消費者を対象とするものではなく、大都市、さらには国際市場の消費者を対象として生産しているものである。米をクーツォン族に売ることを除けば、格馬の人びとの生業は徹底して大都市の巨大消費を前提にして展開してきた。格馬の人びとは者米で売った換金作物がどのように加工され、どこに行くのかを全く知らない。格馬の人びとは自分たちの目に見えない消費者を相手にして、特定の生産物を集中的につくる生業戦略をとってきたのである。

この目に見えない消費者を相手にする換金作物は、値段が激しく変わる。レモングラスの事例でみたように、導入当初は値段がよくても数年すると値崩れする。この地域の換金作物は古くから作っていたものではなく、新しくよそから持ち込んで栽培面積を広げていったものが多い。一度換金作物として有望だとみなされると、個人的な努力だけでなく政策をとまなまって瞬間に地域全体に広まって行く。急激に作付け面積が広がっていくと、短期間にその換金作物の供給過剰状態が生まれる。結果として換金作物の価格が下がってしまう。こうした変化は者米郷のなかだけで起こるわけではなく、近隣の郷や県など行政単位を超えて急速に進んでいく。したがって高収入が期待できるのは価格が高いと聞いて作付けをはじめた最初だけで、すぐにそれほどもうからない換金作物へと変わってしてしまうのである。

(2)市場経済的世界を拡大するための元手としての可食野生動物

ドラスティックに価格が変わる換金作物に依存する一方で、格馬の人びとは可食野生動物を食生活のなかにとり入れて、積極的につかってきた。しかし格馬の人びとは、可食野生動物は生活に必要な不可欠のものにとらえているように思えない。というのもB氏の家の食事の例でみたように、B氏の家の食事では可食野生動物は毎回出てくるものではなく、定期市で買ったものと交代で登場するものだからである。つまり可食野生動物が登場する日には定期市で買った食材はほとんど出てこないし、逆に定期市で買った食材が登場する日には可食野生動物は登場しない。こうしてみると彼らの生活にとって可食野生動物は、積極的に必要な「あるべきもの」ではなく、消極的に「あってもよい」ものである。逆に言えば、無くてもなんとかなる食材なのである。

梅崎は中国海南島のリー族の可食野生動物利用について、「食べるもの」と「食べられるもの」とは違うことを指摘している[梅崎 2004]。梅崎が指摘する「食べるもの」とは中国語で「蔬菜」に区分される畑で栽培する野菜のことであり、「食べられるもの」とは狩猟や採集で得るものことである。リー族にとって、かつて可食野生動物は「食べられる」ものであって「食べるもの」ではなかったのではないかというのである。ところが化学調味料を導入したことで可食野生動物の価値は高まり、それまで単に「食べられるもの」であった自然資源が以前より積極的につかわれるようになったという。こうしたことが起こった背景として、梅崎はリー族がもともと持ち合わせていた「自然利用のジェネラリスト」としての資質を挙げている⁽¹⁶⁾。

もう一つ、梅崎がリー族の可食野生動物の利用の特徴としてあげているのは、リー族の「ワッサウ」(生えたもの)と「ワー」(植えたもの)という自然資源の利用区分である。そして「ワッサウ」に分類される生えたものは誰がどこでとってもよいという。このことから梅崎はリー族の資源管理が井上真のいう「タイトなコモنز」[井上 2001]とは別の非常におおらかなものであると述べている[梅崎 2004: 125-127]。

格馬の人びとの可食野生動物利用は、梅崎の報告したリー族の場合とよく似ている。つまり格馬の人びとも他人が植えたものや人が育てたものを持ってきて食べることはない。格馬の人びとが狩猟・採集するのは自然のなかにいるものや自然に生えたものである。これらの可食野生動物は狩猟や採集の対象にはなるが、格馬の人びとはそこに現金経済に流通する金銭的な価値を認めていない。ほかの少数民族のなかには定期市にドクダミやクワレシダなどの可食野生動物を持ち込んで売る人びともおり、可食野生動物も金銭的な価値が生じ得る。しかし格馬の人びとにとっては可食野生動物は自分の土地やそのまわりのどこにでもあるものであり、誰でも自由にとることのできるものであって、金銭的な価値を認めるものではない。格馬の人びとは市場で可食野生動物を売っているのをみても「あんなものは格馬にはいっぱいある」と言って見向きもしない。

自然資源の所有形態という面からみれば、格馬とその周辺の集落の人びとにとっては可食野生動物は、完全にオープンアクセスの自然資源である。この可食野生動物はクーツォン族の水田に行くととることもでき、またほかの民族が格馬の人びとの土地にやってくることも許される。それはこの自然資源がほかの民族と格馬の人びととの間で、また格馬の人びと同士の間で競合する対象ではないからである。本節の最初で述べたように、格馬の人びとにとって可食野生動物は

「あってもよい」食材であり、無くてもなんとかかなる食材である。つまり水田や畑からそれぞれ所有の決まった市場経済に必要な資源をとり除いて最後に残る元手のようなものでもある。

鳥越皓之はコモンズの議論のなかで、共同体のなかで自由につかえる自然資源は、困窮したときに助けあうための最後の砦であり、弱者生存権を保証してきたと論じている [鳥越 1997]。つまり地域社会に市場経済が入り込むなかで、人びとは困窮したときのために予めバッファーをつくって最悪の事態を避けてきたというのである。

格馬村の可食野生動植物の利用も、先に述べたようにそれがあってもよく、無くてもよいという点からみれば、鳥越のいうコモンズと同様の存在にもみえる。たしかに格馬の人びとにとって、換金作物の価格が急変しやすい状況のなかで可食野生動植物をつかいつづけることは市場経済化による変化にともなっておこるショックを吸収するクッションの役割を果たしているだろう。お金がなく定期市で食材を得られない状況になったら、可食野生動植物をとる生活に戻ってしまえばいいのである。そうした最低限の生活を保証するものとしての自然資源という意味でも、可食野生動植物は生活の元手である。

しかし同時に格馬の人びとの活動は、むしろ遅々として進まない市場経済化に対して、伝統的な生活のありようを足がかりに市場経済的な生活スタイルを拡大していこうとする動きとしてみることができそうである。つまり伝統的な可食野生動植物の利用を元手にして、少しずつ市場経済社会のなかの消費者としての立場を拡大しようとしているようにみえるのである。

農耕社会で市場経済化が浸透した結果、起こりうる変化について、市川光雄は市場経済化が進むと少数の栽培作物が栽培されるようになり、多様な農一食複合体が単純化し、人びとは商品作物を売った利益で食料その他の生活物資を購入するようになるのとまとめている [市川 1997: 154]。この議論は焼畑農耕を念頭においたものであるが、格馬の人びとの生業活動が置かれた状況にもよく似ている。格馬の人びとの生業活動はこれまで述べてきたように、より高額の商品作物を育てることを通じて、市場経済化に対応しようとしてきた。その意味で格馬の人びと生計活動は可食野生動植物をさかんに食べているとはいえ、一元的に市場経済の論理に接合していこうとする傾向がある。

前述の議論のなかで市川は生業経済と市場経済という言葉をつかって、在来の生計活動と近代化にともなう経済的な変化を説明している。市川は生業経済を社会関係の生産を目的とした経済と位置づけ、市場経済は富の生産を目的とした経済として位置づけている [市川 1997: 155]。格馬の人びとはこの議論に則って言えば、「富の生産」を目的とした生業活動を強く志向している。

マイナー・サブシステムの議論 [松井 1998] や生業複合論 [安室 1998] は市場経済のなかで金銭的に有用とはならないものの、人びとがさかんにつかう自然資源に注目してきた。これらの議論は生業経済と市場経済に分けたうち、金銭的な取引が起りにくい生業経済の文脈のなかでさかんにつかわれる自然資源に注目する必要性を論じてきた。

本稿で論じてきた可食野生動植物も、これらの議論が論じたように市場経済の流通という側面からみればほとんど価値のない自然資源である。いわば生業経済の側に位置する自然資源の使い方である。格馬の人びとの活動は一見、マイナー・サブシステムの議論にみられるように金銭的な重要性は低い。しかし格馬の人びとの大都市に向けた新しい換金作物の追求と、一見すれば伝統的にみえる可食野生動植物の利用は無関係に重層構造をとって併存しているわけではなさそうである。

市場経済における生産活動とは異なる文脈で、市場経済からは隔絶されたものとして存在しているように見える可食野生動物の利用も、実際には市場経済への適応策の失敗を吸収するクッションであると同時に、市場経済化の論理に適応していくための積極的な手段の一つとして、そして元手として機能しているのである。つまり可食野生動物をつかいつづけることこそが、大都市向けの換金作物に依存し市場経済のなかの消費者としての立場を確立しようとする格馬の人びとの戦略の一端なのである。

おわりに

これまでみてきたように格馬の人びとは、いわゆる伝統的な生業経済の維持よりも、むしろ市場経済にシフトすることに労力を費やしてきた。しかし格馬の人びとの市場経済への適応は、これまで述べてきたように実際にはそれほど成功していない。むしろ者米郷やその周辺の少数民族たちと比べれば、出遅れているようにも見える。

このような状況のなかで格馬の人びとがとった戦略は、市場経済にシフトしながら、充足できない部分をこれまでのやり方で補うという方法だった。つまり金銭的に十分でないがゆえに、食生活のなかに積極的に可食野生動物をとり入れてきたのである。

格馬の人びとは可食野生動物を全く食べない食事をして、とりたててそれを問題にすることはない。もし定期市でたくさんの食材を買って余裕があれば、何日でも定期市で買ってきた食材をつかいつづけている。定期市で買った食材と可食野生動物がほとんどの場合、いっしょに出てこないということは、定期市で買った食材と可食野生動物がとり換え可能な食材であることを意味している。つまりなるべく定期市で金銭を出して買ってきたものを食べようとしながら、一方で十分でない部分を可食野生動物の利用で補っているのである。

そこには伝統的な食生活に対する執着のようなものはほとんどみられない。むしろ人びとは近隣のクーツォン族がそうであったように、商品価値の高い植物を育ててそれを換金し、消費者として定期市で買うことのできる食材に依存して生活することを戦略としている。一見、伝統的な生活を維持しているかに見える可食野生動物の利用も、一方では生活の最低限を保証する意味合いをもちながら、同時に市場経済化に適応した生業活動を押し進めていくための元手として作用している。このようにみればマイナー・サブシステムの議論が論じてきたような金銭の獲得にとってそれほど重要にはみられない活動も、生活を全体で見れば市場経済化と深い関わりをもって、地域社会の生業活動の全体を変えていく原動力になり得ると言えるだろう。

現在の可食野生動物に対する格馬の人びとの態度は、換金作物の栽培が軌道に乗らない現在の市場経済化への対応の過渡期のごく一時的なものである可能性が高い。市場経済化の波にすんなり乗ることができ、換金作物だけで十分生計を立てることができるようになれば、格馬の人びとはおそらく可食野生動物の利用をやめてしまうだろう。とはいえ、この定期市の食材に全面的に依存できるような可能性を持ちつつ、同時に可食野生動物の利用を手放さないことが彼らの市場経済化への現在の対応を特徴付けていると言えよう。

註

(1)——本稿でひらがなでよみがなをつけたものは、中国語の発音を声調を除いて表記したものである。

(2)——クーツォン族はこの地域にすむラフ族の自称である。ラフ族は行政的な区分であるが、本稿ではこの地域に一般的な名称を採用して、行政上ラフ族に分類される民族をクーツォン族とよぶ。クーツォン族は中国政府によって1983年にラフ族の一支系と認定された〔金平県志1994〕。現在はクーツォン族の多くがクーツォン族だけの集落をつくって生活することが多い。しかし以前はハニ族とともに生活することも多かった。遺伝的に民族を分類する試みによれば、雲南省の15民族に対するホスホグルコムターゼの比較調査の結果からハニ族とラフ族は遺伝的に違う民族とされている〔鄒 et al. 1994〕。

(3)——ハニ族は中国雲南省を中心に、ミャンマー、タイ、ラオス、ベトナムなど5ヶ国の広い範囲にまたがって住む少数民族である。ハニ族の人口は136万人程度といわれ、そのうち90万人が雲南省内に住む〔史編1999〕。ハニ族はハニ語を話す民族である。このハニ族は壮大な棚田をつくることで有名な民族である。ハニ族の文化を扱った書籍の多くは壮大な棚田をつくるのがハニ族の一つの特徴であるとしている〔白1998, 史編1999, 馬 et al. 2000, 雷2001〕。

(4)——ハーベイ人は行政上の民族名が判明していないエスニック・グループである。者米郷のなかにはハーベイ人の集落は1つだけしかない。

(5)——者米郷に住む漢族はすべて、者米の町で商店を開いて暮らしている。人口から見ると、者米郷および老集寨郷では漢族はごく少数であり、圧倒的に少数民族の人口が多い。

(6)——アールー族は老集寨郷に住む彝族の自称である。行政上は彝族に分類されるが、本稿では自称であり者米郷および老集寨郷地域で一般的につかわれている名称を用いる。

(7)——民族の名前は一般に中国語で表記するが、ここでは音で表記する。それぞれの民族の中国語表記は、アールー族は阿魯族、タイ族は傣族、チワン族は壮族、ヤオ族は瑶族、ミャオ族は苗族、クーツォン族は苦聰族、ハニ族は哈尼族と表記する。ハーベイ人は哈備人である。

(8)——現在では張姓を名乗る家族同士は血縁関係がないものの、おなじ張姓を名乗っている人同士は結婚することはできない。

(9)——ハニ族は独自の文字をもたない。ハニ語の表記

には、国際表音記号に従う場合と中国でピンインに倣って開発されたハニ文という表記法に従う場合がある。本稿では音が確定できたものについてはハニ文をつけた。なお、音が確定できなかった単語についてはカタカナのみで表した。音の確定には『漢哈尼詞典』〔楊 et al. 2001〕、『哈尼語哈雅方言土語詞匯対照』〔張 et al. 1998〕、『はにわ辞典』〔稲村 online : <http://www013.upp.sonet.ne.jp/hani-akha/>〕を参考にした。なお、文中でイタリック体で表したアルファベットは学名を示すものである。

(10)——1ムー（亩）は約6.67アールである。

(11)——世界有用植物事典〔平凡社1989〕によればレモングラス *Cymbopogon citratus* はオガルカヤ属の植物でインド原産の多年草である。株は1mから1.5mになり、葉は長さ50cm、幅1.5cmほどである。レモングラス油には50%から80%のシトラールが含まれており、香水や石鹸などの原料となる。本稿でレモングラスとよんでいるのは、オガルカヤ属の植物であり、*Cymbopogon* に属することは間違いないが、その正確な種については同定していない。しかしハニ族は栽培する植物を中国語では「香茅草」といい、「香茅草」は日本語では「レモングラス」と訳すこと、また『漢哈尼詞典』〔楊 et al. 2001〕では中国語の「香茅草」をハニ語の「paqqpil」に訳されていることから、便宜上ここではハニ族が育てる換金作物をレモングラスとよぶ。

(12)——耕耘機につかうようなエンジンをつかい、運転台と荷台をつけた簡易トラックのことである。

(13)——ハニ族はあまり多く家具を持たない生活をしている。しかし、結婚をするときには親が娘に化粧箱に家財道具を入れて持たせる習慣があり、木工製品は欠かせないものである。牛籠には木工製品をつくって定期市にある家具業者に売る業者がおり、者米地域の産業の一つとして成り立っている。

(14)——藍色はハニ族の民族を象徴する色だという。ほかにヤオ族なども藍で染めた衣服を着ていたようである。ハニ族の場合、男性も女性も伝統的な衣服は藍色をしていた。近年では男性の衣服は工業製品に変わり、女性の衣服も形は伝統的な側面を残しながらも生地は化学繊維の布に変わってきており、藍の需要は減っている。

(15)——牛籠の人びとのなかには、者米郷内の各集落に出かけて白い綿布を買う仕事をする人びとがいる。買い集めた綿布は集落で藍染めにして定期市などで売ってい

る。藍染めの布は婚姻のときなどに各家一枚ずつ持ち寄りたりするため、大量に必要なになっている。また儀礼のために伝統的な男性衣装をつくることもあり、このときにも藍染めの布が必要になる。

(16)——「自然利用のジェネラリスト」は掛谷誠が論じた議論である〔掛谷 1998〕。掛谷は自然に依存しながら生きるアフリカの人びとの生活様式を「自然利用のジェ

ネラリスト」と「自然利用のスペシャリスト」にわけてみせた。掛谷によれば「自然利用のジェネラリスト」とは自然に対する広範な知識をもち、多種多様な自然資源をつかって生きる人びとのことである。梅崎は潜在的には知っていながら実践されていなかった知識が化学調味料の出現によって生かされた結果、可食野生動植物の利用がさかんになったと論じている。

引用・参考文献

- ・阿倍卓 2002 「ジノ族村落の農耕・狩猟採集・家畜飼育—雲南少数民族の一九九〇年代の生産活動」松井健編『核としての周辺 講座・生態人類学6』京都大学出版会 pp.121-158。
- ・白玉宝, 王学慧 1998 『哈尼族天道人生与文化源流』雲南民族出版社。
- ・戴慶厦, 段祝榮, 羅書文, 李批然編 2001 『漢哈尼詞典』雲南民族出版社。
- ・金平苗族瑶族傣族自治州地方志編纂委員会編 1994 『金平県志』三聯書店。
- ・掛谷誠 1998 「焼畑農耕民の生き方」重田真義編『アフリカ農業の諸問題』京都大学学術出版会, pp.59-86。
- ・市川光雄 1997 「環境をめぐる生業経済と市場経済」『岩波講座 文化人類学 第2巻 環境の人類誌』岩波書店。
- ・池谷和信 1996 「生業狩猟から商業狩猟へ—狩猟採集民ブッシュマンの文化変容」田中次郎, 掛谷誠, 市川光雄, 大田至編『人間の探検シリーズ 続 自然社会の人類学—変貌するアフリカー』アカデミア出版, pp.21-49。
- ・稲村務 『はにわ辞典』online : <http://www013.upp.so-net.ne.jp/hani-akha/haniwa.htm> (2008.4.20 閲覧)。
- ・井上真 2001 「自然資源の共同管理制度としてのコモンズ」井上真, 宮内泰介編『コモンズの社会学』新曜社 pp.1-28。
- ・李克忠 1998 『寨神—哈尼族文化実証研究』雲南民族出版社。
- ・雷兵 2002 『哈尼族文化史』雲南民族出版社。
- ・松田凡 2005 「青いモロコシの秘密 余剰なきムグジの生存戦略」福井勝義編『社会科される生態資源—エチオピア 絶え間なき再生』京都大学学術出版会 pp.71-97。
- ・松井健 2001 「マイナー・サブシステムの世界—民俗世界における労働・自然・身体」篠原徹編『現代民俗学の視点1 民俗の技術』朝倉書店, pp.247-268。
- ・西谷大 2005a 「雲南国境地帯の定期市—市の構造とそその地域社会に与える影響—」『東洋文化研究紀要』第147冊 pp.83-116。
- ・西谷大 2005b 「市のたつ街—交易からみた多民族の交流—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第121集 pp.339-400。
- ・西谷大 2007 「市の誕生と都市化—生業経済の定期市から市場経済の市へ—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第136集 pp.267-334。
- ・鳥越皓之 1997 「コモンズの利用権を享受する者」環境社会学学会『環境社会学研究』3, pp.5-14。
- ・梅崎昌裕 2004 「環境保全と両立する生業」篠原徹編『鳥の生活世界と開発2 中国・海南島—焼畑農耕の終焉』東京大学出版会 pp.97-135。
- ・安室知 1998 『水田をめぐる民俗学的研究 日本稲作の展開と構造』慶友社。
- ・史軍超編 1999 『雲南民族文化大観叢書 哈尼族文化大観』雲南民族出版社。
- ・張佩芝編 1998 『哈尼語哈雅方言土語詞匯対照』雲南民族出版社。
- ・鄒浪洋, 申濱 1994 「雲南省15个民族紅細胞PGM1 亜型分布調査」『遺伝学報』21-5 pp.342-349。

(国立歴史民俗博物館外来研究員)

(2010年7月26日受付, 2010年10月9日審査終了)

The Hani People's Use of Edible Wild Flora and Fauna in the Border Region of China

HAYAMA Shigeru

This article is intended to clarify the livelihood activities of the Hani people and their utilization of edible wild flora and fauna in Gema Village, Zhemi, Jinping County, Yunnan Province, China. In the Zhemi region, a rapid-growing market economy has been promoted in recent years. The Hani people in Gema grow cash crops for large cities as a measure for promoting the market economy. Another measure for promoting the market economy that the people in Gema take is a positive use of edible wild flora and fauna. In this article, the reason that such edible wild flora and fauna have been used continuously is studied.

First, concerning livelihood activities, the people in Gema grow lemon grass, cassava, and paddy rice as cash crops. These cash crops are transported to large cities and consumed. As one measure, products that people in the Zhemi region consume may be grown through differentiation of livelihood in the Zhemi region from that in other villages. People in Gema, however, selected the production of cash crops for large cities.

Another action of the people in Gema for promotion of the market economy is the positive utilization of edible wild flora and fauna. Even now when the market economy has been promoted and people have more chances to obtain cash, they use edible wild flora and fauna. The survey result regarding the content of their diet showed that people in Gema use what they buy at fairs and what they get from hunting/fieldwork with almost equal frequency.

One of the reasons that people in Gema keep using edible wild flora and fauna lies in the economic structure of this region. In this region, even if cash crops are planted rapidly in a wide area with expectation of high income, excessive production will soon occur, resulting in a price collapse. For people in Gema who take the livelihood strategy of depending on cash crops, the utilization of edible wild flora and fauna serves as a cushion for reducing the instability of cash crop prices. A simultaneous positive utilization of edible wild flora and fauna allows an aggressive trial of growing of new crops having high commercial value. Utilization of edible wild flora and fauna is also motivating power to promote a market economy of the livelihood activities of the village.

Key words: minority people, cash crop, development, fair, hunting, field work
